

歌のかけ橋

中部編

六法出版社

岡井隆



岡井 隆（おかい・たかし）

1928年(昭和3年)名古屋市に生まれる。1955年慶応義塾大学医学部卒業。現在、国立豊橋病院内科医長。1946年「アララギ」に入会。1951年「未来」創刊に加わる。1955年ごろ塚本邦雄、寺山修司らと前衛短歌運動をおこし、現在にいたる。「未来」編集責任者。
＜著書＞歌集；『斉唱』『土地よ、痛みを負え』『鷺卵亭』『人生の見える場所』など9冊。
評論；『現代短歌入門』『メトロポールの燈が見える』『正岡子規』『遙かなる斎藤茂吉』など多数。

歌のかけ橋

昭和五十八年四月十日初版発行

定価一五〇〇円

著者 岡井 隆

発行者 秋 山 茂 則

発行所 株式会社 六法出版社

〒一六〇

東京都新宿区新宿一―二六―一二

(電話)(〇三)三五四―五四―一

振替東京 四―一九二五〇三

印刷・製本 日新印刷・高崎製本

0095-0216-9217

落丁・乱丁はお取り替え致します。 1983©

歌のかけ橋
岡井隆

六法出版社

目 次

I

木曾のこもり波	斎藤茂吉……………15
谷間のライバル	島木赤彦……………19
かなしかる願	斎藤茂吉……………23
子規の岐蘇	正岡子規……………27
模写と反復	長塚 節……………31
オプローモフの歌	杉浦明平……………35
戦後の学生の歌	鈴木定雄と野場鑛太郎……………39
組織に生きる	吉田正俊……………43
ある転勤者の歌	堀内通孝……………47
即物主義の功罪	土屋文明……………51
「ひたくれなるの生」	斎藤 史……………55

鳥髪はどこか 山中智恵子……………59

モダニズムの由来 斎藤 史……………63

月明と雁 山中智恵子……………67

若き定家 春日井 建……………71

兄・いもうと 平井 弘……………75

詩から歌謡へ 福島泰樹と村木道彦……………79

師弟交響のこと 石井直三郎と加藤将之……………83

十方に若葉あり 五島 茂……………87

花とユーモア 加藤将之と島田修二……………91

無につくす人 百々登美子……………95

空をゆく蝸牛 斎藤すみ子……………99

春の夜の宴に絹を 稲葉京子……………103

金色の鯉に眠る 三田澤人……………107

能登、望郷の唄 岡部文夫……………111

母の国へ	坪野哲久……………115
海辺の墓	折口信夫と藤井春洋……………119
顔のない男	岡野弘彦と春日井建……………123
歌の行方	斎藤史と福島泰樹、岡野弘彦と釈迢空……………127

Ⅱ

青草原の人	島木赤彦……………133
八丈島のゴーガン	島木赤彦……………137
魚と漬菜	島木赤彦と久保田不二子……………141
海の歌	放心の歌 五味保義……………145
湖は母の幻	武川忠一……………149
西国の人	塚本邦雄……………153
昏き器	河野裕子……………157

生地への旅	塚本邦雄……………	161
挽歌・ロマネスク	木俣 修……………	165
羞しさの耳	永田和宏……………	169
未知よりの声	生方たつゑ……………	173
故郷をもたぬ人	柴生田稔……………	177
旧派から新派へ	佐佐木信綱……………	181
観潮楼歌会周辺	森鷗外と佐佐木信綱……………	185
ある医学者の歌	飯島宗一……………	189
変心の刻	成瀬有と永井陽子……………	193
蓮華田の牛	大島史洋と永井陽子……………	197
北から来た男の唄	我妻 泰……………	201
長安の大き落日	辺見じゅん……………	205
水いろの憂悶の旅	若山牧水……………	209
詩人の妻	若山喜志子……………	213

寂かなる雷雲	明石海人……………217
合わせ鏡の歌集	山田はま子と金井秋彦……………221
花びらと蝸牛	金井秋彦と山田はま子……………225
農村に病む	金田千鶴……………229
伊豆大島の闘病者	土田耕平……………233
天龍の水の行方	太田水穂……………237
草を刈る音	窪田空穂と宇都野研、藤居教恵、大岡博……………241
若葉と電柱	稻森宗太郎……………245
多才多能の人	稻森宗太郎……………249

あとがき及び拾遺編

春日井濱・春日井政子……………	257
吉野鉦二……………	259

浅野梨郷……………261

水谷一楓……………262

作家一覽

装幀 小紋 潤

歌の
かけ
橋



木曾のこもり波——斎藤茂吉

こもり波あをきがうへにうたかたの消えがてにしてゆくはさびしゑ

斎藤茂吉の歌である。「こもり波」という言葉は辞書にはない言葉で、おそらく茂吉の造語でもあるのか。あたらしい言葉を造るなどということは、よほど言語感覚にすぐれていないとできないのである。

新しい言葉を造って、しかも読者にもなっとくさせるためには、造り方に一定の法則がないとだめであろう。『日本国語大辞典』をひらくと、「こもりず 隠水」「こもりぬ 隠沼」などと